

所員自著紹介

1. 齊藤ゆか, 森和夫, 西村美東士 (編著) 『学びの見える化の理論と実際: 教育イノベーションにむけて』 勁草書房, 2023年3月, 296頁

本書は、職場や学校で獲得すべき能力を明瞭化する手法であるクドバス (CUDBAS) を活用し、「学びの見える化」の課題と展望を論じている。CUDBAS (クドバス) とは、*A Method of Curriculum Development Based on Vocational Ability Structure* (職業能力の構造に基づくカリキュラム開発手法) の略称である。

これまで教育における課題は、何が問題か、何が課題か、未来への見通しが見えていない現実があった。また、方法論の未確立や検証の曖昧さがあった。

そこで学びの見える化モデルは、事実に基づく目標設定から実行結果の検証までを扱う。このモデルは教育を含むどの分野でも適用が可能である。しかし、本書は「学びの見える化」の理論編と、実際にそれを推進する上での指針となる実践編の全6章で構成した。特徴は次の点にある。第1は「教育」「人材育成」の上位概念の「学び」を据え、「働く」と同レベルで「学び」を対象とした。第2は企業内教育、生涯学習、職業教育、専門的職業人養成 (行政・非営利組織)、学校教育を対象に「学び」の本質を扱った。第3は「学びの見える化」の原理を示し、その実践事例を豊富に示した。第4に「学びの見える化」で新たに見いだせる諸事象を明らかにした。本書の意義・意味と共に、示された方法論・手続きに従って研究及び実践を深めることで、職場の人の問題・課題を明らかにし、解決へ導いた。

2. *A Sense of Plausibility in Vision and Music Perception* Tatsuya Yoshizawa (Ed.), T. Yoshizawa, N. E. Scott-Samuel, H. Kojima, G. Maehara, U. Leonards, K. Ono, R. Matsunaga, H. Shoda, N. Asakura Asakura Publishing, 2023/2/1, 113 ページ

A Sense of Plausibility in Vision and Music Perception is released as a proceeding of the international symposiums on Perception and Cognition Systems for Nature of Plausibility held at Kanagawa University from 2019 to 2022 and is contributed by nine experts. This book introduces the outcomes of recent scientific research on the sense of plausibility, which is experienced in everyday life. The sense of plausibility is obtained in various situations and aspects and is empirically a familiar sensation. However, it can be challenging to describe itself linguistically. One might acknowledge that this sensation is not a simple recall of stored memories stored based on one's own experience. Therefore, it is a fascinating research topic to clarify and describe such a vague psychological phenomenon and its mechanism.

和訳

『*A Sense of Plausibility in Vision and Music Perception*』は、2019年から2022年にかけて神奈川大学で開催された、もっともらしさの性質のための知覚と認知システムに関する国際シンポジウムの議事録として公開されており、9人の専門家が執筆しています。本書は、日常生活で経験される「もっともらしさ」についての最近の科学研究の成果を紹介するものです。もっともらしさの感覚はさまざまな状況

や側面で得られ、経験的に馴染みのある感覚です。ただし、それを言語的に説明するのは難しい場合があります。この感覚が、自分自身の経験に基づいて保存された記憶の単純な呼び出しではないことを認める人もいるかもしれません。したがって、このような曖昧な心理現象とそのメカニズムを解明し記述することは興味深い研究課題です。

TOC

Part I Plausibility in Visual Perception 1

1. Visual Plausibility of Objects and Mechanisms of a Sense of Plausibility
2. Camouflage, and Its Relationship with Plausibility
3. Is Chromatic Motion System Lateralized?—On the Issue of Lateralization of Visual Function—
4. An Implausible Impression of Stereogram Could Be due to Perceptual Enhancement of Luminance Modulation
5. Urban Design and Visual Plausibility—When Vision Leads the Body Astray—

Part II Plausibility in Music Perception and Speech Perception

6. Effects of Perceptual Grouping in the Brain Processing of Sounds
7. The Processing of Tonal Organization in Music
8. The Audience Effect on Music Performances
9. A Kalman Filter Model for Adaptation to Delayed Auditory Feedback in Adults Who Stutter

3. 大津由紀雄・南風原朝和 編『高校入試に英語スピーキングテスト?』

久保野雅史「第4章 なぜ東京都は ESAT-J の実施にこだわるのか」共同執筆
岩波書店, 2023 年 11 月, 全 84 頁中の p. 59~p. 72

2022 年 11 月に実施され都立高校の入学者選抜の資料として利用された ESAT-J (中学校英語スピーキングテスト (English Speaking Achievement Test for Junior High School Students)) には, さまざまな問題点が指摘されている。本書は, 部分的改善では到底解決できないこのテストとその入試への利用が孕む深刻な欠陥を検証し, 全国で同種のテストが導入される危うさを訴えるものである。本書の構成は以下の通りである。

はじめに……大津由紀雄・南風原朝和

第1章 ESAT-J とは何か?……沖浜真治

第2章 入学者選抜試験としての ESAT-J の公平性と合理性——不受験者に対する措置に焦点をあてて……南風原朝和

第3章 入試への英語スピーキングテスト導入を検討する際の基本事項——急ぎ過ぎた都教委が見落としたもの……羽藤由美

第4章 なぜ東京都は ESAT-J の実施にこだわるのか……大津由紀雄・久保野雅史

第4章では, 国の英語教育政策に沿った形で, 他の都道府県に先んじて英語教育の「実用化」のための施策を東京都が次々と打ち出し, その具体策の一つとして ESAT-J が位置づけられることを, 英語教育戦略会議という有識者会議の議事録等を基に明らかにした。

4. 松本和也『戦時下の〈文化〉を考える ― 昭和一〇年代〈文化〉の言説分析』
思文閣出版, 2023年8月, 260ページ

これまで、論者は昭和10年代の文学言説を歴史的に検討する作業を継続してきた。その際、太宰治（受容）を1つの軸としつつ、『昭和十年前後の太宰治 〈青年〉・メディア・テキスト』（ひつじ書房, 2009）を皮切りに、『昭和一〇年代の文学場を考える 新人・太宰治・戦争文学』（立教大学出版会, 2015）を中仕切り、そして『文学と戦争 言説分析から考える昭和一〇年代の文学場』（ひつじ書房, 2021）を集大成として、作家・作品に捉らわれることなく文学言説の地平を分析的に見渡してきた。

そうしたなか、浮かび上がってきた時代のキー・マンは、文学座の創設者にして、大政翼賛会文化部長を務めることになる、劇作家の岸田国土であった。そして、岸田国土を軸に、改めて昭和10年代の（文学言説ならぬ）文化言説を検証することが焦眉の課題となった。

昭和戦前期、〈文化〉はどのように語られ、いかなる意味を担っていたのか――。日中戦争開戦前、フランスを中心とする思想にアクセスできる文学者や哲学者にとって、〈文化〉は迫り来るファシズムに抵抗するための根拠だった。それからわずか数年、〈文化〉は多くの国民が関わり、太平洋戦争を支える旗印となっていく。本書では、この「文化の擁護」から「文化の建設」へと至る歴史的転回を、当時の膨大な言説の分析から検証した。